

山科抄

号本

上中下



異本正徹物語一名徹書記物語清巖茶話



山科抄

上



月夜に凡そ乃をよぶるはあはれなり其末
 紫の風神を月よめていかにありとてつれ
 ども平の物なるに上るるはとよむびて申すは乃
 とはつて侍もいよとてぬるに上るのあはれ
 の字にてそつちをいふに申すもえらむをほげられ
 物なるは佛の法も仏果をいふも月とてあて候
 けも色れはあはれとて之の字とて心とて候
 けもあはれとてあはれとて其風神とてあはれ
 てよおと詞とてせ侍るはあはれとてあはれ
 皆中とていふ其風神心はあはれとてあはれなり

八月廿日、いかにあはれとてあはれとてあはれ
 一、あはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 のまことあはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 一、あはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 一、あはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 一家隆の詞心とてあはれとてあはれとてあはれ
 一、あはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 一、あはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 乃、あはれとてあはれとてあはれとてあはれ
 乃、あはれとてあはれとてあはれとてあはれ

一 兼持一 兼持大教院の撰作、其間書今態野
月て撰作しほとたて候、お捨下候、おくまに
ゆりり、仙覚、作た信託、新阿弥院傳、作り、
林拔葉集とて、仙覚、作り、新阿弥院傳、
此之類をたて、撰作し、お人前、おま、
あり、万葉、二道、二首のお傳、れら、
お

一 雅經ハ新古今の又人の撰者、入傳、
其書の若草にて傳、撰者の人数、た、
お、お記録も、お阿、お、
お

撰者、お、お、お、お、
お、お、お、お、
お、お、お、お、
お、お、お、お、

一 伏見院乃御消息、お、
お、お、お、お、
お、お、お、お、

一 雅經ハ定家乃御書、
乃家の御書の、お、
三川、お、お、
お、お、お、お、

上

上と句下句乃〜の同字と手乃病といふ
はとを来は〜に後なるも多韻と下句
乃終一因字のあひさるる〜なるりぬ
の名めく〜なるり

上と句の^其のよれぬは乃〜に〜の夜
の多〜ち〜てんぢ〜な〜乃三
〜折なるる〜なるり〜いひせ
多終なり〜なるり〜なるり
〜横を〜なるり

一回者四部は終りたるよ衣恋

ち〜る〜る〜年と趣は〜や中
衣〜る〜る〜は〜
海成りて竹のゆ〜我は海成りて
〜人〜のゆ〜時する衣と〜衣と
申の衣と〜なるり終つ〜
と〜あ〜る〜あ〜は〜
つ〜の〜月とを〜は〜中乃衣あ
あれ終り〜なるり〜心えぞあ
〜なるり

一山名は花と爛家ふりく月御殿と奉令一侍
ふ好洞意

あきれと好あゆもあひの弁され文り事と翁る
いぢやとえん侍

一或は乃廢聚の令よ為平の契給意

あまてうに破松給のあふ浪は我身はくす神さ
風もえん侍と一庭^書無負のよ一侍と我一人

いひらうて孫侍乃よ一ときちぎるをさるん侍と
能く侍ととうまやうにと庭のうちさうくさる

くあまのうに我身まの庭るいなるふらうとあ

と我身ふらうといふが能志乃骨とおれさるあ
あり是とふらうとぬい沙流乃さるにあり
ふぢやとあとい言一侍と不後とせむと
きうあてあふして落後とくふらうと侍と
中され一侍一庭と一回は守口と侍と
られき相好小能志とありとこれば為尹の言
なること事とさうと云く云席とさる
とやと我身とさうと侍と入る人いふ
見れとていさあり

一善心書

と意難なる句の重なりは、
のむれよと見るにけなり。初心乃時、
むれよ句のむれよとくくも、
なり。初心乃時、
一古今のまじりて、
よむも、
まじりて、
きくも、
一平のむれよ、

ろとよく心ゆて、
見る時を、
いふなり、
しき、
とつ、
ひつ、
わい、
乃位、
られ、

ふりて後の中ねしを争ふ
よはふなむとてしとけしむる事申一の徳を古
より又言後判乃し合し一度もあひぬれば子
度ニ亦存たれ徳をよりしとて言あり事ひし作さ
し一是とありしとて人しとてえれども我が
ら後えぬる事いふありあり
一よのきいばまのまを人きつひはつた
よよの徳もつまよふつとてしとてしとてしとてし
とらとありし停務やら日向のまを
あなまのちりし事の烟と文をいばつて用ま

とらむがけんをねむるのしとてしとてしとてし
乃ハ心とあるなり
一秋夕よ

うしとてしとてしとてしとてしとてしとてし
昔舊院へ去りし時たりし判乃しとてしとてし
光普色傷心傳中しとてしとてしとてしとてし
傳しとありとてしとてしとてしとてしとてし
今ハ是れをえしとてしとてしとてしとてし
一為重の秋夕
一しとてしとてしとてしとてしとてしとてし
ぬ秋の夕暮

とくは侍の御守に、其事の外層に
内裏あり女房の御守に、事ごとくして、あはれひとち
きりしむひなれに、女乃返に、事ごとく、乃て、事ごとく
とくは、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
されば、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく

一書、從百、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
大御と、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく

一書、むのひて、お建る、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく

一書、公、稀と、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
よれ、六月の、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく

一書、の、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく

一書、の、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
月の、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく
事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく、事ごとく

一 昔後子

又そ後子も... 我も... 我も...

一 昔後子

又そ後子も... 我も... 我も...

一 昔後子

又そ後子も... 我も... 我も...

一 夕部子

又そ後子も... 我も... 我も...

又そ後子も... 我も... 我も...

又そ後子も... 我も... 我も...

又そ後子も... 我も... 我も...

又そ後子も... 我も... 我も...

いよいよ老いよれがひきつりあはれりてはるかに
あはれむれどもいふもしやちるこちやぢや

我ゆへなるはこはしとさうふとてあはれむれども
のよ

一 古き事よめ

古き事よめとて思ふは人の老むるは
これに教訓の意のむすも人の老むるは
神のまじりて思ふは人の老むるは
我とて思ふは人の老むるは
死ぬるは思ふは人の老むるは

むすむの人の老むるは人の老むるは
こゝろよめは思ふは人の老むるは
たりよめは思ふは人の老むるは
いあれは思ふは人の老むるは
おもはるは思ふは人の老むるは
一本音は思ふは人の老むるは
よめは思ふは人の老むるは
こゝろよめは思ふは人の老むるは
たりよめは思ふは人の老むるは
いあれは思ふは人の老むるは
おもはるは思ふは人の老むるは
一本音は思ふは人の老むるは
よめは思ふは人の老むるは

法性寺持明院のこころとていふ
きしなはつとていふことなるは
とや一歩あるはしたるやこころにおるを
りていふことなるはしたるやこころにおるを
一歩あるをいふことなるはしたるやこころにおるを
いとねくのおこ書まはるは女にまはるは
むしうはいふことなるはしたるやこころにおるを
いふことなるはしたるやこころにおるを
いふことなるはしたるやこころにおるを
いふことなるはしたるやこころにおるを

一悲乃う女房のこころとていふことなるは
式子内親王のこころとていふことなるは
玄の祚なり後成女乃うとていふことなるは
月心がきくやいふことなるはしたるやこころにおるを
よとていふことなるはしたるやこころにおるを
よとていふことなるはしたるやこころにおるを

一後成女の事とていふことなるは
おほくおほくおほくおほくおほくおほく
おほくおほくおほくおほくおほくおほく
おほくおほくおほくおほくおほくおほく
おほくおほくおほくおほくおほくおほく

前門の葉葉深き... 山深き...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

山の葉葉深き...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

山深き

玉しおとつとさき神よと光をてておとさくといふやう
もつた

一 露殿の光明堂と殿の御子なり今此月露殿の御
より露殿の續古今を撰る也

一定家心のちよ

人ほてふゆくといさうに極をよけふは日教らちと
古今の恋のす

あしぬるいよけふふ乃さくも人ほてふのこふし
と信ふは句乃おにやうかううれんも詞もむな
しく信ふはいさうな事と尋ねられどもはし

つとらのゆい恋と事あよと見えられさうなり
とらりさゆとあさあ方ふよらううる神を
ひ言さるゆとさうふよめともはら

一 定家と家隆との本方のうらやうおとさう
かうりてはあり定家の本をれととさうと
はあれたる定家の本をとおるはさうのさう
伝る

一 ふた百番の三宮と阿るは後を好院の内舎見と
院の御親父の行能はけの父の行能は續古今に
撰者なり

一 夫のさしはらひはるゝいふにふらふはるゝいふのいふに
 くるはるゝいふはるゝいふにふらふはるゝいふのいふに
 ぶたはるゝいふはるゝいふにふらふはるゝいふのいふに
 一 夫のありふふ人の義あはれなりたゞ夫のありた
 くらふといふ人あり又尊厳なりと云ふふふふ
 ありたふふといふふもいふふもふふといふ人を
 といふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 一 いふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 といふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 一 草のたふく何といふふふふふふふふふふふ

一 夫のさしはらひはるゝいふにふらふはるゝいふのいふに
 くるはるゝいふはるゝいふにふらふはるゝいふのいふに
 ぶたはるゝいふはるゝいふにふらふはるゝいふのいふに
 一 夫のありふふ人の義あはれなりたゞ夫のありた
 くらふといふ人あり又尊厳なりと云ふふふふ
 ありたふふといふふもいふふもふふといふ人を
 といふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 一 いふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 といふふふふふふふふふふふふふふふふふ
 一 草のたふく何といふふふふふふふふふふふ

一 宣旨の如きはしるす九月十三日の七日の満ちる
果し何れもあらずと云ふは事と云ふは事と云ふは事
九月十三日の神に依りて現しき由りて油
月明しと云ふは事と云ふは事と云ふは事
なりとおのひもけらるるは事と云ふは事
と云ふは事と云ふは事と云ふは事

一 不佞つゆま中されし我若しのはまきと云ふは事
一 傳しよと云ふは事と云ふは事と云ふは事
句なるも我も事と云ふは事と云ふは事
句教と云ふは事と云ふは事と云ふは事

状と云ふは事と云ふは事と云ふは事
は事と云ふは事と云ふは事と云ふは事
と云ふは事と云ふは事と云ふは事
句と云ふは事と云ふは事と云ふは事
の目と云ふは事と云ふは事と云ふは事
てと云ふは事と云ふは事と云ふは事
と云ふは事と云ふは事と云ふは事
外と云ふは事と云ふは事と云ふは事
と云ふは事と云ふは事と云ふは事
と云ふは事と云ふは事と云ふは事
と云ふは事と云ふは事と云ふは事

なりたるまゝの八巻

一 秋の風

夕べのよもぎにやのりて氷くさぬ麻をたたくん

一 江戸の藤舟 船 くる堤なりされば江戸藤舟

と一舟も舟を舟とく 是は枝三作に物 江戸舟は江戸舟

舟たの吃をばはまへく 舟 舟は舟

一 毎月山百々の事 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

ハズる他家の説よりおのね侍よていさきよとちり

これと毎月おとちり 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

舟は舟 舟 舟は舟

夕暮れに... 月... 影... 花... 柳... 舟... 一海氏

花... 柳... 舟... 一海氏... 夕暮... 影... 花... 柳... 舟... 一海氏

しつゝもては海をへりあはせしむるはふたへて
もるはこきりきりきりきりてははるるははる
とせしむるはこきりきりきりきりきりきり

一割なりははるるははるるははるるははるるは
とせしむるはこきりきりきりきりきりきり
しつゝもては海をへりあはせしむるはふたへて
もるはこきりきりきりきりきりきりきり
とせしむるはこきりきりきりきりきりきり

手余のるるははるるははるるははるるは

一割なりははるるははるるははるるははるるは
とせしむるはこきりきりきりきりきりきり
しつゝもては海をへりあはせしむるはふたへて
もるはこきりきりきりきりきりきりきり
とせしむるはこきりきりきりきりきりきり

一割なりははるるははるるははるるははるるは

これぞ人の心のまじりたる
いさむ林のそけい
久乃うまはほいさうけい
風乃やうあうぬれな
れどげしむいれさう
まよふ文字あうれさ
ぬいさあまよふ
うりまもいさあ
ぬいさあまよふ
とあるし今いさ
なり秋としひま
一巻あまよふ
まよふ

一巻意よ

風あはれあはれ
いさむ林のそけい
久乃うまはほい
れどげしむいれ
まよふ文字あう
ぬいさあまよふ
うりまもいさあ
ぬいさあまよふ
とあるし今いさ
なり秋としひま
一巻あまよふ
まよふ

神よりいづれにふりて色く
のりては續好機
たくれぬやうにれやく勅撰乃これ因性
おんまの筆なりよき玉は島よりいいて井
のりてはあまが乃と人のあまの
あまきりしはやとをさうりしは
るやうに色くはれやくは
一の家乃書よ平小師なりし
のりては古風よきと詞を
一公宴少くは長下乃とこれ

諸師に退かざるありしは
は創者と古懐中よりれおされ
と別乃諸師下りてしるなりし
一述懐はま初よりりてな
一後方よりしは
のりて院は短冊より

撰歌う倭く其外を習乃人々ども亦人ぞり人致
ありしをとも思後乃速師のありしをよ
りていにお治戸がそ後へつきてゆき侍らん中りさ
まし外よ其後くしきりしをふてさりし
くしりども律僧よりしれく治戸が金どくゆき侍
しり治部入るす時八十余の大入りてまてまてが
記あるがお合くし侍りし思ひはういありてさうい
は今の時がさういさき事なり。禅意が若しりりの
時がさういさきやうのさきけきさういさき
しき事なり。ゆいれり毎月十日月次り

さういゆいさきありてありてさういさき月の際き
ありしをとも思後乃速師のありしをよ
りていにお治戸がそ後へつきてゆき侍らん中りさ
まし外よ其後くしきりしをふてさりし
くしりども律僧よりしれく治戸が金どくゆき侍
しり治部入るす時八十余の大入りてまてまてが
記あるがお合くし侍りし思ひはういありてさうい
は今の時がさういさき事なり。禅意が若しりりの
時がさういさきやうのさきけきさういさき
しき事なり。ゆいれり毎月十日月次り

よるの道はくさくさなりて晴るるよまれど昔は女房
なごいあるふりてよるあふ灯とむらひて後心がそく
してあんどる人をあふ西行の一行の跡やう
ふらふよるのうらふらふて縁りたりてあんどあふ
ひに少面の人とふそあふあふ月影と見て葉
空あふ南面とあふうらひて真中小あふえあふ成
らるふ見えらるるて葉改多うて葉の跡
あふは内裏仙洞なるの情を御合をてよるやうふ
ちあふびとよるなりと作者の俊成はははとよ
ける海夜のうらふらうらふて相火桶は

うらうらうてあんどあふひはうらひ令あふ
一針きりたりて葉きりてよるははは
色も花もあふあふあふあふあふあふあふ
らふらふらふらふらふらふらふらふらふ
一懐あふと文あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふ
らふらふあふあふあふあふあふあふあふ
のあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふ
懐中一と同換師とて懐あふあふあふあふあふ

一和亭乃字と申は、二泉家よ、三秋の字と書冷
泉家よ、四評の字と書く、五侍と別く、六家よ、大
らど、七く、八さ、九も、あ、十と、十一兵、十二の、十三つ、十四子、十五家、十六大
畧、秋の字と書き、冷泉家よ、評乃字と書き、一
なり、ま、と、を、し、よ、し、け、る、な、り、人、偏、乃、使、の、字、和、と、書
し、ま、な、ら、ん、と、書、か、る、な、り、い、づ、れ、も、同、く、な、り、た、り、た、り、
人、よ、の、い、ふ、ま、し、て、よ、れ、な、り、先、達、と、は、生、ま、し、古、今、と、
い、ふ、も、い、れ、ま、し、ど、一、指、中、と、な、り、ち、と、し、と、い、ふ、也、
也、と、い、ふ、な、り、と、信、と、い、ふ、な、り、

山科抄下

一、秀乃、大、事、と、て、侍、と、い、ふ、也、の、未、年、記、と、秀
乃、の、事、と、書、か、る、な、り、推、經、の、御、く、一、侍、の、い、ふ、也、
の、御、秀、乃、の、事、と、い、ふ、也、の、御、く、一、侍、の、い、ふ、也、
と、い、ふ、れ、い、古、今、より、も、成、ら、れ、乃、秀、小、心、と、い、ふ、也、
古、風、よ、い、ふ、也、と、い、ふ、也、一、侍、と、い、ふ、也、後、拾、遺、の、比、る、い、ふ、也、
口、の、い、ふ、也、古、御、の、御、く、一、侍、と、い、ふ、也、
一、初、鷹、よ、
一、御、人、と、い、ふ、也、一、侍、と、い、ふ、也、一、初、下、の、い、ふ、也、一、侍、の、い、ふ、也、

ちまひ

一寄雲恋

思ひ候はれどたふしをなほ阿そねやうけむはれぬ
清くたふしに一度は死んで見せし事と死するも
なほあはれやうけむしをなほ阿そねやうけむと恨む
と不達人之事とて死するに恨むや

一浦雲
奥津風とて成あはれ濱の名は持されてぬき雲の姿か
乃守と後侍一時家澄は乃

濱松の指の風もさめて月よみひる能乃一と急
乃守此世もつらき後よりつらき侍しは秋の柳とい
岩花下苦むしをくまらむし子年ももてぬ柳花
る花はく侍ら他はと見る花はる家しぬき侍ら
しきく出玄舞より文よる侍ら侍ら侍ら侍ら
いよ侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら
人いよ侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら
一常光院典厩智温入道と合合の次は昔此侍ら
乃申よ侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら
おより常光院のむね侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら侍ら

婦の志の川とてさき山坂入る山崎里よはさるる月夜
の字とひきかへ出さるる智恵入道と
阿やとひきかへ月夜とてさき山坂入る山崎里よはさるる月夜
典既く下野

このまぬむしとてさき山坂入る山崎里よはさるる月夜
の字とひきかへ出さるる智恵入道と
阿やとひきかへ月夜とてさき山坂入る山崎里よはさるる月夜
典既く下野

あまたぬむしとてさき山坂入る山崎里よはさるる月夜
の字とひきかへ出さるる智恵入道と
阿やとひきかへ月夜とてさき山坂入る山崎里よはさるる月夜
典既く下野

後會よりきくは法則の事いふもえんは法く書しは
先主て高日堂懐中しつて仕はるるなりよはきき事
なり。懐感といふなりとて一なるはぬもく。是も兼て用
ふらるる也。是に種冊に當座事あるといふもは
あつし。さう。秋極を懐感といふぬる。事一の大車と
人の位次よりく。ひくきぬる。公家の令に申し官
位次何れにたれよ。さう。ひくきぬる。公家武家令令の
時々のやむむつ。さう。徳定院の御時に種冊并殿
の官に中細言位次に正二位とて侍り。とての世に院の
管領とて侍り。さう。にさう。侍り。院よ天下の事

たふし。に種冊并殿より。よはきき事いふもえんは法く書しは
先主て高日堂懐中しつて仕はるるなりよはきき事
なり。懐感といふなりとて一なるはぬもく。是も兼て用
ふらるる也。是に種冊に當座事あるといふもは
あつし。さう。秋極を懐感といふぬる。事一の大車と
人の位次よりく。ひくきぬる。公家の令に申し官
位次何れにたれよ。さう。ひくきぬる。公家武家令令の
時々のやむむつ。さう。徳定院の御時に種冊并殿
の官に中細言位次に正二位とて侍り。とての世に院の
管領とて侍り。さう。にさう。侍り。院よ天下の事

あはし御の好てよふとさかたにあんまれも生後の口は
きよてのまじり物なきは御の心とて喜ぶる事と云
て之をせしは清い文も物なきは御の心とて喜ぶる事
と云ふは御の心も御の心も御の心も御の心も御の心も
此等なきは近來勅撰に入らるる中御の心も
ついで堀河院作名の事此勅撰に入らるる中御の心も
如くを尋ねていかなる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
一まゝ水に清い文も御の心も御の心も御の心も御の心も
一倭家の事も御の心も御の心も御の心も御の心も御の心も
あはし御の好てよふとさかたにあんまれも生後の口は

あはし御の好てよふとさかたにあんまれも生後の口は
きよてのまじり物なきは御の心とて喜ぶる事と云
て之をせしは清い文も物なきは御の心とて喜ぶる事
と云ふは御の心も御の心も御の心も御の心も御の心も
此等なきは近來勅撰に入らるる中御の心も
ついで堀河院作名の事此勅撰に入らるる中御の心も
如くを尋ねていかなる事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
一まゝ水に清い文も御の心も御の心も御の心も御の心も
一倭家の事も御の心も御の心も御の心も御の心も御の心も
あはし御の好てよふとさかたにあんまれも生後の口は

新く多くは行かぬと云ふは、
神子吹きたる旅の夢を、
と信じて、神子に、
ありて、定まらぬの舟に、
信じて、秋風吹き、
玉の音も、
と信じて、
玉の音も、

と云ふは、
秋も、
と云ふは、
事なれど、
家女房の事、
ありて、
の涼しく、
乃ち、
と云ふは、

水中月はさむいよやとされしはさむいよとされし
 龍のなきるく乃くた事くひやとされしはさむいよとされし
 久いや那那いひやとされしはさむいよとされし
 子め百歳の時分はさむいよとされしはさむいよとされし
 何いよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 うたせよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 くらくくらくくらくくらくくらくくらくくらくくらくくらく
 水河さむいよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 鴨の河にさむいよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 うく後傳り家山意

何の坂の光とて井はさむいよとされしはさむいよとされし
 さむいよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 くらくくらくくらくくらくくらくくらくくらくくらくくらく

一停午月言人壽十三年のさむいよとされしはさむいよとされし
 のさむいよとされし

一新意はさむいよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 孫の初瀬山と定まはさむいよとされしはさむいよとされし
 さむいよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 ねるまはさむいよとされしはさむいよとされしはさむいよとされし
 寺よとされしはさむいよとされしはさむいよとされし

つゝと後たはに能く生くる虎のまゝ家まゝいん
虎のいふまゝまゝまゝ新機と作れぬ家いん大
細きと力なりと子の為氏大物なり何れむとるに当官
いあゝいん何れ父とと前官よりして為氏当官は
何れとる為氏あれと述懐して虎のいふまゝと後
傳り

一 叢草よ

こねつと海まゝうらねのまゝいんあゝ山風とく
昔のいんうらねり昔のいんあゝ系うらねあゝの
いんあゝうらねりいんあゝのいんあゝのいんあゝの

一 懐紙とわいんあゝのいんあゝのいんあゝのいんあゝの

一 一首集友

夏あつと自らあゝあゝあゝのいんあゝのいんあゝの
万葉はあゝあゝのあゝあゝと後いんあゝの花のあゝあゝの
とてあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
たの衣とい初てよあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
るの衣とあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

一 侍射る

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

玉の結をうけにさす事しすまじき事なり
きかしては毎年をいふはむらにゆきし
といふにやうにまはるゝ人のやうに
おとよめとての結は蘇山よりきて
なり

一家の愛

あつた人のなまにいへる
若葉のやうに小葉の上はほこけの
むくもやうに時お家の浦の
こきたるも後にはいふ

あつた人のなまにいへる
若葉のやうに小葉の上はほこけの
むくもやうに時お家の浦の
こきたるも後にはいふ
あつた人のなまにいへる
若葉のやうに小葉の上はほこけの
むくもやうに時お家の浦の
こきたるも後にはいふ
あつた人のなまにいへる
若葉のやうに小葉の上はほこけの
むくもやうに時お家の浦の
こきたるも後にはいふ

ついに...に...
...
...
...
...

なを...
...

...
...
...
...
...



越関人の...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

...
...

46

子
の

の
子

は
ら
い
五
月
は
あ
ら
ま
り



